



# 秋野不矩と 東山魁夷

— 情熱と静寂、二人の路 —

2017年4月15日[土]—5月28日[日]



東と西、南と北、京都と東京、  
女と男、黄土と群青。  
真逆の道を歩むも、ともに時代を  
真摯に生きてきた。

秋野不矩（1908—2001）と東山魁夷（1908—1999）は、ともに明治41年に生まれ、平成10年代に90歳を経てなお、精力的に活躍した文化勲章受章の画家です。

秋野不矩は、静岡県二俣町に生まれ、21歳で京都に出て、竹内栖鳳の高弟、西山翠嶂の青甲社に入門。40歳の時に上村松篁、山本丘人らとともに「創造美術（現創画会）」を結成しました。54歳の時にはインドのビスパ・バラティ大学（現タゴール国際大学）の客員教授として赴任。厳しい自然とそこで逞しく生きる人々の姿を描き、独自の画業を切り拓きました。

一方、東山魁夷は、香川県櫃石島出身の祖父をもって、横浜に生まれ、神戸に育ちました。東京美術学校で結城素明に師事し、同校研究科修了後にドイツへ留学。39歳の時に戦後間もない第3回日展において《残照》で特選を受賞。風景画家として立つことを決意し、ドイツ、北欧をはじめ、信州、京都と各地を訪ね風景を描き続けました。

同時代を歩んだ2人の画家は東西あるいは南北へ、まさに真逆を歩み、秋野は灼熱のインドへ、東山は凜然とした北欧や日本の自然へテーマを求めました。女に対して男、京都に対して東京、用いる色は黄土に群青と、いずれにも相反する道ながらも、ともに己に厳しく制作を見つめ、画業に専念した生き様と作品は、今日もお絶えることなく、人々の心に深く感銘を呼び起こしています。

この展覧会は、まもなく生誕110年を迎えようとする2人の本画、スケッチ、版画作品から、同時代を画家として真摯に生き、人々に愛され続けてきた画業をあらためて探ります。



秋野不矩

(あきの ふく 1908—2001/明治41—平成13)



東山魁夷

(ひがしやま かいい 1908—1999/明治41—平成11)

撮影/寺島照夫

- 1908年 静岡県磐田郡二俣町(現浜松市天竜区二俣町)生まれ。
  - 1927年 19歳で千葉県大網町の石井林響に師事して日本画の基礎を学ぶ。
  - 1929年 京都に出て、竹内栖鳳門下の西山翠嶂の画塾、青甲社に入門。翌年22歳で帝展に初入選した。
  - 1948年 40歳で「世界性に立脚」する日本絵画の創造を目指し、上村松篁、広田多津、吉岡堅二、山本丘人、福田豊四郎らとともに日展を離れて「創造美術（現創画会）」を結成した。
  - 1949年 京都市立美術専門学校(現京都市立芸術大学)の助教授に就任、以後教授に就任し、1974年京都市立芸術大学名誉教授となる。
  - 1951年 若手女流日本画家に贈られる第1回上村松園賞を受賞。
  - 1962年 54歳でインドと出会う。インド・西ベンガル州シャンチニケータンのビスパ・バラティ大学(現タゴール国際大学)の客員教授として1年間赴任。この滞中で、独自の画業を切り拓いた。
  - 1978年 京都市文化功労者表彰
  - 1991年 文化功労者顕彰
  - 1999年 文化勲章受章
- インド歴訪と滞在は生涯で通算14回にわたり、さまざまな風物を描いた。

- 1908年 香川県櫃石島出身の祖父をもって、横浜に生まれ、神戸に育つ。
  - 1931年 東京美術学校日本画科卒業後、23歳で研究科に進み、結城素明に師事。21歳で帝展に初入選した。
  - 1933年 研究科修了後にドイツに留学。翌年ベルリン大学哲学科で美術史を学ぶ。
  - 1947年 第3回日展で《残照》が特選を受賞。風景画家として立つことを決意。
  - 1950年 第6回日展で《道》を出品し、日本の復興と重ねて多くの人々の共感を呼んだ。
  - 1956年 日本芸術院賞を受賞。
  - 1962年 北欧4か国を遊歴し、さまざまな風景を写生。
  - 1966年 皇居新宮殿障壁面制作のため、日本各地の海岸を訪ね、写生。
  - 1968年 皇居新宮殿障壁面《朝明けの潮》を完成。
  - 1969年 文化勲章受章、併せて文化功労者顕彰
  - 1975年 唐招提寺御影堂第1期障壁面《山雲》《濤声》を奉納。
  - 1980年 唐招提寺御影堂第2期障壁面《黄山晓雲》《揚州薫風》《桂林月宵》を奉納。
- ドイツ、北欧をはじめ、信州、京都と国内外の風景を描いた。

# 秋野不矩

- 1 **紅裳**  
1938 (昭和13) 208.0×174.0  
紙本彩色 京都市美術館
- 2 **裸童**  
1956 (昭和31) 120.0×135.0  
紙本彩色 浜松市秋野不矩美術館
- 3 **カミの泉Ⅱ**  
1976 (昭和51) 124.0×256.0  
紙本彩色 アフガニスタン、バンダミール  
京都国立近代美術館
- 4 **池のほとり**  
1983 (昭和58) 82.5×181.0  
紙本彩色 インド、西ベンガル州コルカタ  
京都国立近代美術館
- 5 **土の祈り**  
1983 (昭和58) 118.0×247.0  
紙本彩色 インド、ビハール州マドパニ  
京都国立近代美術館
- 6 **廻廊**  
1984 (昭和59) 151.3×101.0  
紙本彩色 インド、西ベンガル州ビシュヌプール  
静岡県立美術館
- 7 **海辺のコテージ**  
1984 (昭和59) 88.5×225.0  
紙本彩色 インド、オリッサ州プリー  
浜松市秋野不矩美術館
- 8 **裏町 (カルカッタ)**  
1984 (昭和59) 95.0×299.0  
紙本彩色 インド、西ベンガル州コルカタ  
京都市美術館
- 9 **廻廊の壁画**  
1986 (昭和61) 140.2×206.7  
紙本彩色 インド、カルナータカ州ベールール  
浜松市秋野不矩美術館
- 10 **朝の祈り**  
1988 (昭和63) 145.0×85.0  
紙本彩色 浜松市秋野不矩美術館
- 11 **廃墟Ⅱ**  
1989 (平成元) 127.0×275.0  
紙本彩色 インド、グジャラート州カッチ地方  
浜松市秋野不矩美術館
- 12 **ココナツを持つ女**  
1990 (平成2) 91.6×55.4  
紙本彩色 香川県立ミュージアム
- 13 **ウダヤギリ僧房Ⅱ**  
1992 (平成4) 130.2×197.0  
紙本彩色 インド、アーンドラ・プラデーシュ州ウダヤギリ  
浜松市秋野不矩美術館
- 14 **シウリの花**  
1977 (昭和52) 41.2×52.6  
紙本鉛筆彩色 インド、西ベンガル州  
浜松市秋野不矩美術館
- 15 **サドウ**  
1977 (昭和52) 50.5×40.0  
紙本鉛筆 インド、オリッサ州コナーラク  
浜松市秋野不矩美術館



1<紅裳>  
女性のさまざまな姿態を円形に構成し、そこにさまざまな紅色の凡てを投入してみた。



3<カミの泉Ⅱ>  
アフガニスタン、カブールの東北100キロのパーミヤンから、更に70キロ北上するとバンダミールである。高地の砂漠と書っても乾いた白い岩山地帯である。そこに五つの泉が湧き出ている、まことにこの世のものとも思えない紺碧の色をたたえて連っている。折しも初冬、やがて雷も間近かという季節であったから、僅かに生える草も枯れ連なる岩肌の大地の白と、湖の青、空の青と二色のみである。草が一つの起伏を越えると眼前に青い湖が表われる。又一つ越えると次の湖。湖の青は空の青より深く、夏でもその水温は5度という。自分は五つの湖を一団に連ねたいために天井から眺めた様に描いた。然しあの崇高な美しさを思う時、冒瀆といわざるを得ない事を憶じる。



4<池のほとり>  
カルカッタの裏町、廃寺の後にあった。寺のあった昔は信者の沐浴する池であった。今はスラムの人達の生活に役立っている。皿洗い、衣服の洗濯、子供の水遊び、池のまわりの柵はいたずら鳥の格好のとまり木である。



6<廻廊>  
寺院の外側とめぐる廻廊、森閑としてただ午の陽ざしが強烈にさし込んでいる。



1

3

4

6

8

9

- 16 **歌手サビトリー**  
1982 (昭和57) 44.2×36.7  
紙本鉛筆  
インド、西ベンガル州シャンチニケータン  
浜松市秋野不矩美術館
- 17 **幼女**  
1982 (昭和57) 36.4×26.3  
紙本木炭  
インド、ウッタール・プラデーシュ州ワラーナシー  
個人
- 18 **ウダヤギリ女神**  
1992 (平成4) 41.0×32.0  
紙本鉛筆彩色  
インド、アーンドラ・プラデーシュ州ウダヤギリ  
浜松市秋野不矩美術館
- 19 **ウダヤギリ II**  
1992 (平成4) 26.4×43.0  
紙本鉛筆  
インド、アーンドラ・プラデーシュ州ウダヤギリ  
浜松市秋野不矩美術館
- 20 **ウダヤギリ僧房 II (小下図)**  
1992 (平成4) 46.7×70.5  
紙本鉛筆  
インド、アーンドラ・プラデーシュ州ウダヤギリ  
浜松市秋野不矩美術館
- 21 **砂漠の街**  
30.6×54.5  
紙本鉛筆  
浜松市秋野不矩美術館
- 22 **石柱のための素描**  
52.7×41.2  
紙本鉛筆  
浜松市秋野不矩美術館
- 23 **MANJUSRI**  
44.3×36.8  
紙本鉛筆  
浜松市秋野不矩美術館
- 24 **唄うバウル (素描4)**  
67.7×52.7  
紙本鉛筆  
インド、西ベンガル州シャンチニケータン  
浜松市秋野不矩美術館
- 25 **村落 (カジュラホ) のための素描**  
44.2×36.7  
紙本鉛筆  
インド、マディヤ・プラデーシュ州カジュラホ  
浜松市秋野不矩美術館
- 26 **ロータス**  
41.2×52.6  
紙本鉛筆彩色  
浜松市秋野不矩美術館
- 27 **スケッチブック**  
1977 (昭和52) 35.0×14.5  
紙本彩色  
個人



18



19



20



24



22



25



14



26

## 東山魁夷

- 28 **月宵**  
1948 (昭和23) 104.2×151.5  
絹本彩色  
山梨県南アルプス市  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 29 **ウプサラ風景**  
1963 (昭和38) 60.3×92.4  
紙本彩色  
スウェーデン、ウプサラ  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 30 **エルシノアの街**  
1963 (昭和38) 60.0×81.0  
紙本彩色  
デンマーク、エルシノア  
香川県立東山魁夷せとうち美術館

29<ウプサラ風景>

レトヴィックからウプサラへの列車の窓から、私は暗い縦の森と、白樺が真直ぐに立ち並ぶ風景、森の中の湿地、森が途切れるところにあらわれてくる静かな湖の、いかにも北国らしい景観の連続するの心にひかれた。

また、ウプサラに近くなると、森と平原の風景になり、平原には石塊がところどころに堆積して、白樺や糸杉のような針葉樹が生え、荒寥とした情感を漂わせているのを見た。それらは、私が心の中に描いていた北方的な風景そのものであった。



28



29

- 31 潮風  
1976 (昭和51) 38.0×41.0  
紙本彩色 石川県、能登  
名都美術館
- 32 秋映  
64.0×72.0  
紙本彩色 名都美術館
- 33 灯台への道  
1962 (昭和37) 30.5×42.5  
リトグラフ 千葉県、犬吠埼  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 34 秋の野  
1962 (昭和37) 28.8×38.5  
リトグラフ 福島県・群馬県、尾瀬沼  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 35 古き町にて 卓上のランプ  
1964 (昭和39) 16.5×19.5  
リトグラフ デンマーク、コペンハーゲン  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 36 古き町にて オールフスの古い町  
1964 (昭和39) 26.0×36.0  
リトグラフ デンマーク、オールフス  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 37 古き町にて ベルゲンの朝市  
1964 (昭和39) 11.5×18.0  
リトグラフ ノルウェー、ベルゲン  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 38 古き町にて ベルゲンの家  
1964 (昭和39) 25.7×35.5  
リトグラフ ノルウェー、ベルゲン  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 39 古き町にて 二つの月  
1964 (昭和39) 33.5×26.0  
リトグラフ フィンランド、ヘルシンキ  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 40 古き町にて ティボリの音楽堂  
1964 (昭和39) 16.0×22.8  
リトグラフ デンマーク、コペンハーゲン  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 41 夕べの町  
1972 (昭和47) 30.0×20.5  
木版画 香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 42 湖岸 大下図  
1991 (平成3) 114.5×166.5  
紙本鉛筆 ドイツ  
香川県立東山魁夷せとうち美術館
- 43 月光 大下図  
1998 (平成10) 69.4×94.5  
紙本鉛筆 山形県、蔵王  
香川県立東山魁夷せとうち美術館

31<潮風>

私は、いま、波の音を聴いている。それは永劫の響きといってよいものである。波を動かしているものは何であろうか。私もまた、その力によって動かされているものに過ぎない。その力を何と呼ぶべきか私にはわからないが――



31

33<灯台への道>

燈台に向うこの道に、私は心をひかれる。乾き切った道、立ち並ぶ黒い電柱、白い大きな墓標。背後の松林に蟬は声をかぎりに鳴き、波のとどろきは絶え間なく聞こえるが、これは夏の日盛りの中にあつて、すさまじいまでに静まりかえった風景である。



32

39

39<古き町にて 二つの月>

月が、空と水の上に二つあった。冴えてはいるが、穏やかな光であった。フィンランドに着いた最初の夜に、その首都の中にあつてさえ、私はこの国の静けさを深く味わったのである……



33



36



38



42



43



【凡例】

表は、作品番号、作品名、制作年、寸法(縦×横cm)、形状技法、取材地、所蔵者の順に記した。  
・制作年、取材地が不詳のものは空欄とした。  
・No.1,3,4,24の解説は展覧会図録『秋野不矩自選展』(毎日新聞社1985年)、『秋野不矩展』(毎日新聞社、浜松市秋野不矩美術館2000年)の作家の言葉から、No.29,39の解説は『北欧紀行 古き町にて』(画文・東山魁夷、明治書房1964年)、No.31は『風景との対話』(東山魁夷、新潮社1967年)、No.33は『泉に聴く』(東山魁夷、講談社1990年 初出:『朝日新聞』昭和34年8月17日)から引用した。  
作家略歴は『生誕100年記念 秋野不矩展』(毎日新聞社、浜松市秋野不矩美術館2008年)、『東山魁夷展—自然と人、そして町』(日本経済新聞社2016年)を参考に編集した。(編:香川県立東山魁夷せとうち美術館 窪美西嘉子)



香川県立  
東山魁夷せとうち美術館  
Kagawa Prefectural Higashiyama Kai Setouchi Art Museum

〒762-0066 香川県坂出市沙弥島字南通224-13  
TEL 0877-44-1333 FAX 0877-44-0220  
http://www.pref.kagawa.lg.jp/higashiyama/